

センチュリー赤尾コレクションとの12年

慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫 文庫長
佐々木孝浩

センチュリー文化財団からの寄託の経緯

慶應義塾大学三田キャンパスの丑寅にある、ゴシック様式煉瓦造の図書館旧館は、義塾創立50年を記念して建てられたものである。その増設棟の4階に、附属研究所斯道文庫^{しどうぶんこ}はある。この風変わりな名前の研究所は、義塾創立100年を記念して寄贈された、財団法人斯道文庫の蔵書を継承して、2年の準備期間を経て開設されたもので、2020年12月に60周年を迎えている。

「斯道」とは『論語』や『孟子』に由来する、仁義の道の意だが、その名が象徴するように、中国はもとより日本を含めた漢字を用いていた国々の書物を対象として、6人の専任教員を中心に、書誌学的方法による研究を行っている場所である。開設時に約7万冊であった蔵書は、寄託を含めて18万冊に達そうとしている。複数存している寄託品の中でも特異な存在であったのが、センチュリー文化財団のコレクションである。

2008年4月、当時主事であった私は、センチュリー文化財団の理事である神崎充晴先生からの電話をいただいた。お名前は存じ上げていたもの、お話しするのも初めてであったので、いささか緊張する中で何ったのは、同財団所蔵美術品の寄託に関するご相談であった。1979年に言語及び言語に係わる文化の理解と普及を目的として、旺文社創業者故赤尾好夫氏により設立された同財団は、1991年から2002年まで文京区本郷の地でセンチュリーミュージアムを運営されていた。日本古典籍を研究対象としている私は何度も通って、展示品から多くを学ばせていただいていたので、ガラス越しに拝見していたあの素晴らしい品々を、斯道文庫で直に調査研究することができるようになるのかと、もう決まったことであるかのように舞い上がってしまったことを、今でもはっきりと記憶している。

従来の日本古典籍の研究で最も欠けている視点は、筆跡と書風・書流に関する分野であると感じていた私にとって、日本の書道史に関する美術品や資料が豊富である同財団の所蔵品を、同ミュージアムの館長であった、日本書道史の大家にして「古筆学」という新しい学問を打ち立てられた、小松茂美博士のご蔵書を含めてお預かりできることは、まさにその欠を補う研究が発展する可能性を秘めたものと感じられたのである。また斯道文庫の蔵書は、中国や日本の漢字文献が充実しているのに比して、日本の仮名系の典籍が手薄であったので、これを補正する存在になることもたちどころに予測できた。

このご相談を受けて、私は同僚の文庫員5名に相談というより懇願して、寄託を受け入れることへの同意を取り付け、当時文学部教授で文庫長でもあった長谷山彰現塾長に報告して、財団と寄託に関する交渉を行うことを認めていただいた。それから幾度も相談を重ねて、9月12日付

で財団より寄託条件に関する正式な提案をいただくに至ったのである。最大の懸案は、斯道文庫の研究とは距離のある金工品や彫刻等の扱いであったが、斯道文庫の収容能力も勘案して、これらを除くことをお認めいただいた。また美術品が保管されている埼玉県の倉庫にも赴き、寄託候補の品々を斯道文庫書庫内に収蔵することが可能であることの確認を行った。そして11月12日の斯道文庫委員会で、文庫外の委員の方々にも承認いただき、同月17日付で塾当局に寄託契約締結の許可を申請したのである。こうして12月5日には財団に対して、幾つかの修正を加えた上で提案受け入れの正式な回答をさせていただいたのであった。

このような経緯を経て、2008年が義塾創立150年に当たることから、これを記念するものとして、2009年2月24日に三田キャンパス旧図書館記念室において、赤尾文夫理事長と安西祐一郎塾長との間で、財団所蔵美術資料1,740件に関する寄託契約書の調印式が開催されたのである。またこれに併せて財団より義塾に寄付された1億円を原資として、「センチュリー文化財団赤尾記念基金」が設立され、寄託品の保管に関する諸経費や、寄託品研究のための助成金などで活用されてきている。

寄託品を収納するための書庫内整備や、移送前の現品確認と封印の作業、移送後の配架と再度の現品確認など、寄託品受け入れ完了までには、なすべきことが山積みであったが、財団のご支援と文庫関係者の協力によって、これを無事に終えることができたのである。

寄託品展覧会について

寄託に関する大きくまた重要な条件の1つは、寄託資料を中心とする展覧会を毎年開催することであった。2009年度は、三田の図書館新館の展示スペースで、塾内向けの紹介を兼ねた小さな優品展を開催するにとどまった。2010年度には、中古文学会大会が三田キャンパスで開催されたのに合わせて、5月18日－23日に当時あった東館の展示スペースで、「和歌と物語の古典籍」展を開き、塾外の方にも初めてご覧いただくことができた。

こうして展示に関するノウハウを蓄積し、新しくオープンした三田キャンパス南別館のアート・スペースや図書館展示室を会場として、慶應義塾大学アートセンターや図書館展示小委員会の協力も得て、2011年度より公式な寄託品展覧会を開催できるようになった。その期間とテーマは以下の通りである。

2011年11月1日－17日 「日本の写経」展

2012年10月30日－11月30日 「日本の書状」展

2013年10月29日－11月28日 「和歌のキャンパス 懐紙にしたためられた歌」展

2014年11月5日－28日 「書と生きる－江戸人の文雅愛好」展

2015年11月4日－27日 「元和偃武400年 太平の美—書物に見る江戸前期の文化」展

2016年11月14日－12月16日 「描かれた古—近世日本の好古と書物出版」展

2017年11月6日－12月15日 「空海と密教の典籍」展

2018年11月12日－12月14日 「禅僧の書と書物」展

2019年6月3日－28日 「本の虫・本の鬼」展

2020年11月9日－12月11日 「文人の書」展

回を追うごとに来場者数も増え、毎年開催も広く認知されるようになっていった。斯道文庫の講座だけではなく、研究科や学部に関連分野の講義でも見学していただけるようになったことは、大学内で展覧会を開催する立場として、実にありがたいことであった。毎回無料配布されるオールカラーのリーフレットも好評をいただけたが、それが可能であったのも「センチュリー赤尾基金」があったればこそであった。

展覧会の開催は、寄託品とじっくり向き合わなければできないことである。文庫員は、贅沢な寄託品から多くを学び、自分の専門知識を活かしてテーマを設定して、解説の執筆に勤しんできた。また寄託品は展覧会ばかりではなく、斯道文庫の書誌学講座や、研究活動でも活用されてきた。寄託品を対象としたり、その調査を通して得られた知見を発展させて生まれた研究業績も、次第に積み重なってきている。センチュリー文化財団の寄託品は、受け入れ以来の12年の間に、斯道文庫の研究活動における血肉となり、もはや欠かせない存在となっているのである。

コレクションの斯道文庫保管分からの展示品

このように寄託品展覧会も順調に開催できるようになっていた2018年1月、寄託分を含む財団所蔵の美術資料全2,325件が、義塾に寄贈されることが決定した。斯道文庫単独では収納しきれないことや、専用の展示施設も必要となることから、収蔵庫や多目的スペースなどを備えた施設が、財団よりの資金協力を受けて建設されることになった。これに合わせて、展示活動のみではなく、収蔵資料を活用した研究・教育・国際交流などの活動を行う機構、慶應義塾ミュージアム・コモンズも設立されることになったのである。新型コロナウイルスなどの影響もあって、予定より若干遅れたものの、2020年9月に三田キャンパスの東側に、展示施設に相応しい、白さも眩しい瀟洒な東別館が完成した。2021年2月25日に財団の清水章理事長と長谷山彰塾長の間で調印が行われ、「センチュリー赤尾コレクション」は正式に義塾の所蔵となったのである。12年間寄託品を守り続けてきた斯道文庫にとっても、誠に誇らしく感動的な出来事であった。

2,325件という数字を見るだけで、コレクションの大きさは理解できるが、実態はこの数よりもずっと規模の大きなものである。寄託されていた「入木道関連写本資料」^{じゅぼくどう}は1件に数えられているけれども、その実態は7,242点・約1万5千冊の古典籍であり、優に1つの文庫コレクションと呼びうるものである。またやはり寄託されていた、江戸初期からの筆跡鑑定の家である、古筆本家^{こひつほんけ}に伝わった「古筆家資料」も、古筆切と筆跡資料の透き写しなどを中心とする、規模の大きな資料群である。

この膨大なコレクションの内、書物や筆跡に関する資料は、屏風などの大型のものを除いて

(以下の件数は便宜上屏風を含む)、基本的に斯道文庫の書庫で保管されている。そして絵画資料や漆工・金工・彫刻等はミュージアム・commonsの収蔵庫に納められている。斯道文庫保管分のセンチュリー赤尾コレクションについて、開館記念展示に出品されている資料を中心に、その概要と特徴について説明させていただきたい。

コレクションの中心となるのは、約1,400件からなる「書跡」部門である。内157件を数える「写経」には、「光明皇后発願一切経(五月一日経)」・「称徳天皇勅願一切経」・「魚養経(葉師寺経)」・「神護寺経」・「中尊寺経」・「東大寺八幡経」などの著名写経の卷子本があり、掛幅となっている断簡にも、「国分尼寺経」・「二月堂焼経」・「一字宝塔経(戸隠切)」・「泉福寺経」・「白描下絵法華経断簡(目なし経)」などがある。この他にも写経断簡を貼り込んだ写経手鑑も2帖存している。日本の写経史を学び研究する上で大学としては屈指の環境であると言える。

出品されるのは、御堂関白藤原道長(966-1027)が自ら書写し、吉野の山奥に祈願を込めて埋納した紺紙金字経の内の法華経の1紙分(出品番号4)と、平氏政権下の政治的混乱の中で書写された、仏教美術作品としても注目できる彩色見返し絵を有する、「紺紙金字観普賢経(平基親願経)」(出品番号5)1軸、そして文学作品的性格を有する『金剛般若集験記』の平安写の巻中(出品番号8)1軸である。わずか3点でも、「写経」コレクションの多様性を理解いただけるのではないだろうか。

「古筆」に分類されるのは、古い書物の断簡である「古筆切」類59件で、古筆切を貼り込んだ古筆手鑑3帖を含んでいる。「香紙切」・「荒木切」・「尼崎切」・「二条切」・「今城切」・「日野切」など、美術的な価値も高い平安時代の切が半数近くを占めており、やはり大学の所蔵資料としては瞠目すべきものであろう。

オープニング展には、平安時代の仮名切を中心に貼り込んだ名品手鑑である「武蔵野」(出品番号14)、古筆切界の女王とも言うべき伝藤原公任筆「石山切(伊勢集)」(出品番号11)、茶道世界でも珍重される藤原定家筆「紹巴切(後撰集卷第20)」(出品番号12)、鎌倉期の優品である伝藤原為家筆「姫路切(源氏狭衣百番歌合)」(出品番号13)、そして漢籍としては珍しい装飾紙を用いた「群書治要卷第30断簡」(出品番号9)が並ぶ。古筆の研究者の立場から見ても、興奮を抑えられない顔ぶれである。

「書状」296件、「懐紙」272件、「短冊」260件は、件数的にも「書跡」部門の中心的存在である。それぞれ長期間をカバーしており、書かれた内容の価値もさることながら、様々な階層の多くの人物の筆跡や、使用された多様な紙質を確認することができるのであり、研究的な意義は非常に大きなものがある。

今回は「書状」からは、鎌倉初期の東国武士のものとして注目できる「榛谷五郎行重書状」(出品番号32)を、「懐紙」からは、室町時代の書作品として興味深い「後奈良天皇二首和歌懐紙」(出品番号16)を選出している。この3分野は、今後の展覧会で中心的に扱われる機会があるはずなので、詳細はその折に譲ることとしたい。

「書跡」では他に、禅僧の筆跡である「墨跡」71件、日本風の書体の「和様」138件、中国風の書体の「唐様」91件なども、層の厚い部分である。やはり次回以降に紹介させていただきたい。

「書跡」の中でも特異な存在であるのが「典籍」48件である。既に廃業した古典籍商の旧蔵品を中心としているので、「書状」的なものも含まれている。平安写の『大唐西域記』・『類聚名義抄』・『法華経単字』など今後の本格的な研究が待たれる資料も少なくない。前述の「入木道写本資料」や「古筆家資料」などもここに含まれるものである。斯道文庫の従来の研究と最も親和性が高い部分であり、今後の研究の進展が期待できよう。

今回は、書家としても高名な烏丸光広からまるみつひろによる、歌道の師細川幽齋ほそかわゆうさいからの聞書の自筆原本『耳底記』(出品番号18)1冊の他、整理中の「古筆家資料」の中から、伝牡丹花肖柏筆ぼたんかしょうはく『源氏物語』「末摘花」(出品番号23)1帖と、伝世尊寺行俊筆せそんじゆきとし「平家物語断簡」ながとぎれ「長門切」(出品番号34)4葉などを出品する。

「絵画」部門281件は、基本的にミュージアム・コモンズに保管されているのだが、「肖像」の中の「歌仙」19件と、「絵巻」19件、及び「その他」49件中の印刷関連資料9件については、斯道文庫が管理している。この度は「歌仙」を代表する存在として、伝冷泉為相れいぜいためすけ筆『三十六歌仙絵巻』(出品番号10)1軸、「絵巻」からは、烏丸光広からまるみつひろが詞書を担当した『西行法師行状絵巻』(出品番号17)4軸、近世期の「平家物語絵巻断簡(巻2・教訓状)」(出品番号35)1幅を出品している。同じ光広の筆跡でも、聞書と絵巻詞書の書きぶりの大きな落差を楽しんでいたきたい。

以上極めて簡略な説明となったが、斯道文庫保管分だけでも、一大学にある美術資料として、「センチュリー赤尾コレクション」がいかに豊穡で贅沢なものであるかを、ご理解いただけたことと思う。

これだけの貴重で価値あるコレクションを慶應義塾大学に寄贈し、その保存と活用、また研究を託して下さったセンチュリー文化財団の篤志を、斯道文庫としても寄託時以上に重くまた正しく受け止めたい。そして寄託いただいていた12年の間に、神崎先生を初めとする財団の方々から、直接に間接にお教えいただいていた、センチュリー文化財団の精神や理念をも受け継ぎ守りつつ、ミュージアム・コモンズを初めとする、塾内外の他部署や専門の方々と協力しつつ、一層コレクションの価値と魅力を高めていきたいと考える次第である。

* 本書では各研究領域で慣例としている語句を尊重した。本書キャプションでは卷子本の頁数を「巻」と表記しているが、このエッセイ中では、国文学の基準に則り、卷子本の因数を「軸」と表記した。